

平成29年は、近代日本の代表的国民作家・夏目漱石の生誕150周年に当たる。また、平成26年は、漱石の代表作『こゝろ』発表100周年になる



新宿区が生んだ国民的文豪・夏目漱石生誕150周年に向けて

〈初の本格的記念館(仮称)「漱石山房」記念館の整備〉

近代日本を代表する作家・夏目漱石は、「国民的文豪」と呼ばれ、その作品は多くの人々に愛され、今日まで読み継がれています。新宿区で生まれ育ち、生涯を閉じた漱石の偉業と、漱石が過ごし執筆を行った地を「土地の記憶」として未来に継承していくため、新宿区では、生誕150周年に当たる平成29年2月の開館をめざし、(仮称)「漱石山房」記念館の整備を進めています。漱石の魅力の世界に発信する、漱石にとって初の本格的記念施設の開設をめざす取組を紹介します。

新宿区で生まれ、没した夏目漱石

新宿区は江戸時代以来、多くの文人たちが活動し作品を生み出してきた地域で、近代以降も坪内逍遙や小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)、尾崎紅葉をはじめ、有島武郎や泉鏡花、斎藤茂吉、林芙美子など多くの文学者が暮らし、この地で作品が生み出されました。明治の文豪・夏目漱石もそのひとりです。漱石は慶応3年、牛込馬場下横町(現在の喜久井町)に5男3女の末っ子として生まれました。帝国大学(現・東京大学)英文科を卒業し、東京専門学校(現・早稲田大学)や松山・熊本での教員生活、ロンドン留学の後、文京区の千駄木・西片町での暮らしを経て、明治40年から早稲田南町に住み始めました。

漱石はこの地に転居したところから作家業に専念し始め、『三四郎』『それから』『こゝろ』『道草』など数々の名作を世に送り出しました。大正5年に49歳で亡くなるまで晩年の9年間を過ごした住まいは「漱石山房」と呼ばれ、漱石を慕う弟子たちが訪れ、「木曜会」と呼ばれる文学サロンが開かれていました。

当時の漱石山房。340坪の敷地の中央に60坪の平屋建て。漱石は、ベランダ式回廊が三方を囲む洋間を書斎とし、作品を執筆していた。「障子に日影の射した処で書くのが一番いいが、他家ではそんな事が出来ぬから、時に日の当る縁側に机を持ち出して、頭から日光を浴びながら筆を取ることもある」と新聞掲載された談話で当時の執筆の様子を語っている



大田区
北区
港区

この木曜会は毎週木曜日に書斎となりの客間で開催されており、高浜虚子や寺田寅彦、芥川龍之介など若い文学者たちが集まりさまざまな話題に花を咲かせました。これは『吾輩は猫である』で名が売れ、漱石の小説家としての地位が確固たるものとして築かれていった千駄木時代、多くの訪問客が夏目家を訪れて仕事ができないことに頭を悩ませていた漱石に、門下生の作家・鈴木三重吉が面会日を定めることを提案し、実現したものです。

漱石山房は当時としては珍しい和洋折衷の平屋建てで、庭の大きな芭蕉の木や、洋風のベランダ式回廊が特徴的でした。二間つづきの10畳を書斎と客間として使用し、胃潰瘍で体調が悪化するまでは、朝9時から10時に起き、

葛飾区
板橋区
世田谷区

● 漱石 & 作品ゆかりの地

水稻荷神社

西早稲田3-5-43 (※昭和39年に移転)

『彼岸過迄』の中に、「後の方に高く黒ずんでいる目白台の森と、右手の奥に藤籬と重なり合った水稲荷の木立を見て坂が上がった」という文がある。

東京専門学校

(現・早稲田大学)

西早稲田1-6-1

漱石が一時、英語教師として勤めていた。友人である俳人・正岡国規と辺りを一緒に散歩することもあったという。

穴八幡宮

西早稲田2-1-11

漱石の妻・鏡子が漱石の虫封じにお参りした神社。

誕生の地

喜久井町1

生誕100年を記念して建てられた石碑がある。夏目家は江戸時代、牛込周辺を治めた名主で、江戸が東京になったころ、漱石の父親の直克が、夏目家の家紋「井桁に菊(平井筒に菊)」にちなんで町名を「喜久井町」と名付けた。



夏目坂

喜久井町

漱石の父・直克が家の前の坂を命名した。

● 小倉屋

夏目坂には、小倉屋という酒屋が今もあり、漱石は自分の子ども時代を振り返って書いた随筆『硝子戸の中』の中で「間口の広い小倉屋という酒屋もあった」と紹介している。



誓閑寺

喜久井町61

『硝子戸の中』で「西閑寺」、「二百十日」で「寒誓寺」として登場する寺。

神田川 (旧江戸川)

『それから』の中に登場する。漱石自身も子どもたちを連れて花見に訪れた。

終焉の地

(区立漱石公園)

早稲田南町7

終の住処、漱石山房があった場所。(仮称)「漱石山房」記念館整備予定地。富永直樹製作の漱石胸像や猫塚がある。



帰国後住んだ家 (跡地)

矢来町3

英国より帰国後、妻・鏡子の実家、中根家の離れに住んでいた。

神楽坂

神楽坂1~6

甲武鉄道牛込停車場の開設で発展、「山の手銀座」と呼ばれにぎわっていた。多くの漱石作品に登場する。

相馬屋

神楽坂5-5

地蔵坂の入口付近にある江戸時代創業の文具店。漱石はこの原稿用紙を使用したことがある。

善国寺 (毘沙門天)

神楽坂5-36

「毘沙門さま」の愛称で親しまれ、縁日のにぎわいは「坊っちゃん」の中にも出てくる。漱石が寺町に下駄を買いに行き、途中胃痛で境内に腰掛けて休んだこともあった。

東京物理学校

(現・東京理科大学)

神楽坂1-3

『坊っちゃん』の出身校。また、三代目校長・中村基平は漱石と懇意で『吾輩は猫である』や『坊っちゃん』の執筆に影響を与えた人物。

津の守坂

荒木町と三栄町の境を靖国通り手前まで下る坂。『それから』にも登場する。

太宗寺

新宿2-9-7

高さ267センチメートルの地藏菩薩像があり、漱石は子どもの頃に上って遊んでいた。

熊野神社 (十二社)

西新宿2-11-2

江戸時代から池と滝を中心とした景勝地で、漱石も散歩に歩いていたという。

朝食に火鉢で焼いて砂糖をつけたパンと紅茶をとり、午前中に集中して執筆活動を行っていました。午後は漢詩を作ったり、謡の稽古をしたり、矢来町の古道具屋をのぞいたりして過ごしていたそうです。

漱石の死後、遺族や木曜会に参加していた弟子たちが山房の保存に尽力し

ましたが、実現されませんでした。建物は昭和20年5月の空襲で焼失し、昭和27年には東京都が跡地を購入し、都営住宅を建設しました。昭和51年に新宿区は敷地の一部を「漱石公園」として整備し、翌52年には都営住宅の土地と建物を新宿区に移管しました。昭和61年に新宿区はこの「夏目漱石終

焉の地」を近代文学史上重要な場所として史跡に指定し、現在この場所は区立漱石公園となっています。

ほかにも新宿区内には、数多くの漱石ゆかりの地があり、漱石の作品にも新宿での生活や体験が随所に見られ、新宿の景色やゆかりの人物も頻繁に登場します。

荒川区
新宿区
江戸川区
練馬区
渋谷区

特別区競馬組合

『吾輩は猫である』のモデルになった黒猫は明治41年に死んでおり、漱石は死亡通知を門下生たちに送った。十三回忌に夫人により猫塚が建てられたが、戦いで家屋とともに焼失した。昭和28年、新宿区が復元した



初の本格的な記念館を漱石山房跡に

平成29年は、漱石生誕150周年になります。かつて漱石山房があつたこの地は、多くの漱石愛好者にとって、漱石の暮らしや創作の息づかいを感じることのできる象徴的な場所です。記念すべき生誕150周年に向けて新宿区では、漱石ゆかりの地として、かつて漱石が住んでいた漱石山房跡地に、平成29年2月の開館をめざし、漱石にとって初の本格的な記念館の整備を進めています。

平成24年度より、漱石や木曜会に集つた弟子たちの親族、学識経験者、地域団体代表、公募委員などで構成される(仮称)「漱石山房」記念館整備検討会を設置し、記念館の基本的なあり

方について検討を重ねてきました。そして平成25年3月に検討会から(仮称)「漱石山房」記念館整備基本計画(案)が提出され、新宿区では、同案を整備基本計画と定めました。

漱石山房の復元は、漱石愛好者だけでなく、多くの人が夢見てきました。記念館の開設をめざし多くの人が関わり、まとめられた基本計画には、こういう施設であつたらうらしい、という人々の思いが集約されています。

(仮称)「漱石山房」記念館は、区立漱石公園と隣接する区営住宅の敷地と合わせ、当時の漱石山房の雰囲気を感じられるように一体的に整備します。

漱石が代表作の数々を執筆した書斎、木曜会が開かれた客間、この二間を取り巻くベランダ式回廊を中心に、検証可能な範囲をできる限り忠実に再現します。再現部分は、当時の生活感のある空間を創出するため、壁面にガラスを使用し庭との一体感を感じられるよう演出するなど、オープンな展示室になる予定です。

漱石の初版本や直筆の草稿の展示はもちろん、大学や他の漱石に関する資料館等との連携を図り、漱石の関連書籍や漱石に関するさまざまな資料の情報を検索できるようにし、ここに来

れば漱石に関しては何でもわかる」といふ漱石の情報センターをめざします。

また、来館者が読書をしながらくつろげるブックカフェやミュージアムショップも設置し、記念館オリジナルグッズなども販売する予定です。

さらに、事業の一環として、講座・講演会のほか、朗読会や映画会、漱石が好んだ落語・講談・クラシック音楽の実演等の企画や、漱石文学賞等の設置も検討していきます。

記念館の庭部分となる漱石公園では、芭蕉・トクサ・桜などの植栽により、訪れた人が当時の山房の四季の移ろいを感じる事ができます。

(仮称)「漱石山房」記念館

漱石に関する本を読みながらゆったり過ごせる図書室やカフェを設置

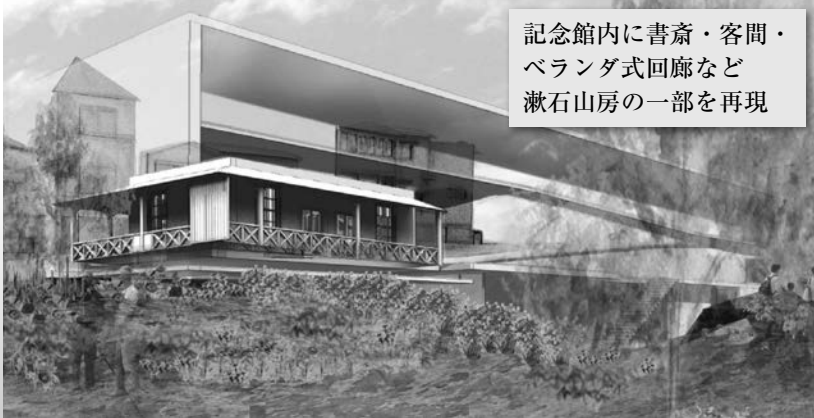
常設展のほか企画展や講座・イベントを開催、漱石文学の世界を紹介

記念館内に書斎・客間・ベランダ式回廊など漱石山房の一部を再現

■ 整備概要

整備予定地	東京都新宿区早稲田南町7番地
敷地面積	2137.25平方メートル (区立漱石公園を含む)
延床面積	1200~1350平方メートル程度
構造	鉄筋コンクリート造
階層	2~3層

(仮称)「漱石山房」記念館建物イメージ。漱石文学とともに、ゆったりとした時を過ごせる記念館をめざす



平成26年2月には、「夏目漱石記念施設整備プロジェクト」第二弾イベントを開催した。写真は、関川さんと半藤さんによる対談の様子

「ともに創る」記念館

新宿区では、(仮称)「漱石山房」記念館の整備のために、「夏目漱石記念施設整備基金」を設置し、平成25年7月1日から寄付の募集を開始しました。また、記念館の整備と併せて「夏目漱石記念施設整備プロジェクト」と題したイベントを展開しています。

その第一弾として、平成25年7月に政治学者・姜尚中さんによる講演会と記念館の整備をテーマとしたシンポジウムを開催しました。当日は、1000名を超える参加者の中、漱石の人物像や作品の魅力をひも解くとともに、初の本格的な記念館への期待を関係者が語りました。

続く第二弾として、平成26年2月9



日には作家・関川夏央さんによる講演・対談と朗読『こゝろ』のイベントを開催し、前日に降った20年ぶりの大雪が残る中、多くの漱石ファンが集まりました。第一部では関川さんが「文学で生活する試み〜一葉から漱石へ」と題して講演、漱石が職業作家をめざした明治時代の出版事情について現代と比較し語りました。第二部では、漱石の代表作『こゝろ』の一部を中国の民族楽器二胡とのコラボレーションで、俳優・榎木孝明さんが朗読しました。そして第三部では関川さんと作家・半

ともに創ろう

夏目漱石記念施設整備基金

新宿区では、(仮称)「漱石山房」記念館の整備にあたり、全国の漱石を愛する皆さまや漱石を研究している皆さま、文化芸術の振興に理解の深い企業・団体の皆さまにご参画いただき、この事業を進めていきたいと考え、「夏目漱石記念施設整備基金」を設置し、平成25年7月1日から寄付の募集を開始しました。施設の整備や関連資料の収集のため、平成29年2月の開館までに2億円を目標額として一口1000円からの寄付を募っています。

基金についてのパンフレットや振替申込書は区役所、特別出張所、区立図書館等で配布しており、10万円以上の寄付を行うと氏名・団体名を記念館内に設置する銘板に記し顕彰させていただきます。

平成26年7月31日現在の寄付の状況

[821件] 4,522万3千円

※寄付の目標額：2億円

今年度はさらに、幅広い世代に漱石や漱石の文学に親しんでもらうため、漱石ゆかりの地の地方自治体・事業者や漱石愛好団体等に協力を仰ぎ、中・高校生の読書感想文や小学生による絵画を募る漱石コンクール

を実施します。こうした寄付や各種のイベント等への参加を通して、漱石を愛する全国のファンに協力を募りながら、記念館をみんなで作ってあげようとしています。漱石の作品の多くは、時代を超えて読者の心を捉え、生きる道標になるとともに、幅広い世代に愛読されています。漱石の生きた明治・大正時代は、長い鎖国の時代が終わり、日本に西洋の文明が入り、社会の制度や人々の習慣が大きく変化した時代です。今から100年前、漱石が小説の中で描いた「近代日本」「資本主義・帝国主義」「個人や自我」というテーマは、現代社会にも通じるものがあります。漱石山房は、木曜会として文豪・夏目漱石を慕う多くの文学者たちが集っていた、近代文学史上において重要な場所です。新宿区は、この地への漱石にとって初の本格的な記念館の整備によつて、国内だけでなく海外でも広く愛されている漱石作品の魅力を広げ発信していきます。こうした貴重な文化・歴史的資源を掘り起こし、継承していくことで、まちへの愛着や誇りを育み、多くの人が何度でも訪れたいと思えるまち新宿の実現につながるものと考えています。

藤一利さんが対談し、元編集者でもある二人のユーモアを交えた対談に会場は笑いに包まれました。今後も、引き続き同プロジェクト第三弾を平成26年12月に、第四弾を平成27年2月に実施予定です。参加者からは「漱石の小説を再読しなくなった」「新宿区に記念館ができると誇りに思う」「この計画を応援したい」「次のイベントにも期待している」等の感想が寄せられており、記念館整備の取組に全国の漱石ファンからの期待が高いことがうかがえます。

を實施します。こうした寄付や各種のイベント等への参加を通して、漱石を愛する全国のファンに協力を募りながら、記念館をみんなで作ってあげようとしています。漱石の作品の多くは、時代を超えて読者の心を捉え、生きる道標になるとともに、幅広い世代に愛読されています。漱石の生きた明治・大正時代は、長い鎖国の時代が終わり、日本に西洋の文明が入り、社会の制度や人々の習慣が大きく変化した時代です。今から100年前、漱石が小説の中で描いた「近代日本」「資本主義・帝国主義」「個人や自我」というテーマは、現代社会にも通じるものがあります。漱石山房は、木曜会として文豪・夏目漱石を慕う多くの文学者たちが集っていた、近代文学史上において重要な場所です。新宿区は、この地への漱石にとって初の本格的な記念館の整備によつて、国内だけでなく海外でも広く愛されている漱石作品の魅力を広げ発信していきます。こうした貴重な文化・歴史的資源を掘り起こし、継承していくことで、まちへの愛着や誇りを育み、多くの人が何度でも訪れたいと思えるまち新宿の実現につながるものと考えています。

大田区 北区 港区 葛飾区 板橋区 世田谷区 荒川区 新宿区 江戸川区 練馬区 渋谷区 特別区競馬組合